

テイ先のデヴィッド・スミスが「こうしたことを気にしない人々もいる」と残念そうに話していたのが印象的であった。

さて、身障者への対応であるが、不特定多数の集まる公共の施設では、非常によく配慮がなされている。今回の最初の訪問地であるシカゴを例にとってみよう。フィールズ自然史博物館は、恐竜化石の展示で知られるアメリカ屈指の自然博物館であるが、展示室通路はすべて段差のないスロープで構成され、実際に多くの車椅子利用者が見学していた(写真3)。建物自体は新しいものではないが、展示品の配列や高さなどに、細やかな心配りを感じることができた。



この博物館のすぐ隣のシェド水族館でも、同様の対応を見ることができた。シェド水族館の一般客入り口は石段の上にあるが、車椅子や幼児用バギー対応の入り口はその石段の下に設置されており(写真4) 利用者は大きなボタンを押すことによって一定時間扉が開いた



写真5

ままになる半自動のドアをくぐって館内に入場することができる(このような半自動ドアはこれ以外にもミネソタ州のスネリング砦のビジターセンターなど多くの施設で見ることができた)。また、イルカの



写真6

ショーの巨大水槽前の観覧席では最前列に身障者優先を示すプレートが置かれていた(写真5)。この水族館で驚かされたことがひとつある。館内のコインロッカーである。上下二段になったコインロッカーの下段すべてに身障者優先の表示がなされている(写真6)のである。われわれの目はどうしても、優先レーンやスロープ、リフトといったものに集中しがちであるが、それらに限らず、常に利用者の立場に立った発想がなされているといえよう。

では、このような公共施設ではなく、通常の街角ではどのような対応がなされているだろうか。写真7はシカゴ交通局の運行する市バスの停留所の表示である。全ての路線では



写真7

ないが、車椅子利用者に対応できる車両が運行されていることを示す表示がなされている。これらの対応がしっかりしているせいかシカゴの繁華街では実際に路上で車椅子の利用者をよく見かけることができる。町で見かけた高齢者の電動車椅子利用者が、ビルの外壁のコンセントから充電をしている風景は決して日本では見かけることのできないものである(写真8)。

このように、多くの施設で、車椅子利用者への配慮が見られるのだが、やはり、古い施設ではその対応はなされていないようである。有名なサン・フランシスコのケーブルカーは1873年の開業で、当時から運行システムや車両の規格は変わっていない。実際に急勾配の区間が多く、ここでは、身体障害者にとっても利用が困難という判断からか、身障者優先の表示などはまったく見られない。サン・フランシスコのその他の公共交通機関(市バス、ミュニメトロ(路面電車))にはすべて対応がなされていることとは対照的であった。



写真8